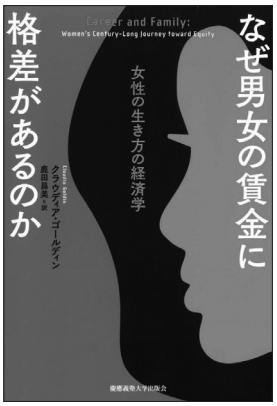
本書の主要目次

第１章　キャリアと家庭の両立はなぜ難しいか―新しい「名前のない問題」
第２章　世代を越えてつなぐ「バトン」―100年を５つに分ける
第３章　分岐点に立つ―第１グループ
第４章　キャリアと家庭に橋をかける―第２グループ
第５章　「新しい女性の時代」の予感―第3グループ
第６章　静かな革命―第４グループ
第７章　キャリアと家庭を両立させる―第５グループ
第８章　それでも格差はなくならない―出産による「ペナルティ」
第９章　職業別の格差の原因―弁護士と薬剤師
第10章　仕事の時間と家族の時間
エピローグ　旅の終わり―そしてこれから



なぜ男女の賃金に格差があるのか
―女性の生き方の経済学

クラウディア・ゴールディン著
鹿田 昌美訳

慶應義塾大学出版会
3,740円（税込み）

バトンは渡された

評者　鈴木 恭子
（独）労働政策研究・研修機構
研究員

著者のクラウディア・ゴールディンは昨年ノーベル経済学賞を受賞した。受賞理由では、一世紀にわたる女性の労働参加と賃金を初めて包括的に説明し、変化の要因と今なお残る格差の原因を明らかにした手腕が「探偵のよう」と称えられた。二〇二一年に刊行された本書は、アメリカにおける女性労働の百年のあゆみが、データに基づきながら推理小説さながらの面白さで描かれる。

ゴールディンは本書で大卒女性に焦点をあて、仕事（ジョブ／キャリア）と家庭の関係から、以下五つの世代に分ける：①家庭かキャリアか→②ジョブのあとに家庭→③家庭のあとにジョブ→④キャリアのあとに家庭→⑤キャリアも家庭も。では、探偵ゴールディンはどのような点で凄腕か。

第一に、彼女は歴史をはるか遠くまで見通す。社会は女性が差別された過去から男女平等に向けて進歩したと思われがちだが、ゴールディンは歴史を遡り、実は変化がU字型であることを明らかにした。百年前には一部の女性もキャリアを追求した時代があったのだが、工業化を経ていったん専業主婦が広がり、その後サービス産業化により再び既婚女性の職場進出が進んだ。だが社会は単に逆戻りしたのではない。女性の仕事は「ジョブ」から「キャリア」へ、ただ収入を得て家計を支えるためのものから、人生をかけて追求するものへと、不可逆的に変容した。

第二に、彼女の証拠集めは広範に及ぶ。彼女は、女性の労働参加と賃金変化をもたらす要因を、幅広く視野におさめる。技術革新は、職場で肉体労働を減らして事務仕事を増やし、家庭で家事労働の負担を軽減するなど、需要側と供給側の双方に大きな影響を与えた。また彼女が明らかにしたのが「避妊用ピル」の威力である。ピルを手に入れた女性は、不本意な妊娠による早すぎる結婚のリスクから解放された。女性は思う存分仕事に没頭することが可能となり、それが労働市場に「静かな革命」をもたらした。さらに彼女は、「ジェンダー規範」といった目に見えない要因も重視する。

第三の、そして最大の魅力は、彼女が当事者の動機を深く理解し、人間の主体性を重視する点だ。ゴールディンは、女性の選択は何よりも「こう生きたい」という女性自身の思いによって駆動されると考える。たしかに女性は、それぞれの時代の社会状況や規範に制約され、同じ時代に生きる女性の多くが結果的には似た人生をたどる。だがそれにもかかわらず、女性が人生の序盤で将来にどのように見通しをたてるか、どのような投資を行うかという戦略が、その後の生き方を決める。そして、そうした個人の選択の集積が、新しい時代の流れを生み出す。

女性は、前の世代の失敗から学ぶ。誰もが若い頃には「母のようには生きたくない」と思い、「自分はもっとうまくやれる」と考える。だが夢中で人生を送るなかで、何かを見逃し何かを諦める。白人中産階級の最も恵まれた女性ですらそうなのだ。そうした苦い経験の蓄積が、次の世代がそこから学び、超えて行くための道標となる。だから本書は、膨大な資料とデータに基づく分析で構成されながら、人間味に溢れている。バトンを繋いでくれた前の世代への限りないレスペクトと、次の世代へのあたたかいエールが根底に流れているからだ。バトンは渡された。